

## 犀星における芸術的「退行」

劉 金 拳

### An Analysis of Saisei's 'Artistic Regression'

LIU Jinju

#### Abstract

Deeply tortured by complex since his childhood, Murou Saisei has gained his 'citizenship' in the literature world through his study of Haiku and his literary creation, and he has ascended to the central literary realm and prepared for his position in the poetic world through writing lyric poems. All these, to an illegitimate son, mean a tremendous success and thus become the fixation in his heart. Although later his change to fiction writing is not a big success, Saisei has automatically 'regressed' to verse writing whenever he fell into low tide. The 'regression' to verse creation has immensely pushed the development of literary creation.

キーワード：韻文、散文、文芸創作、芸術的「退行」、室生犀星

**Key words:** verse, prose, literary creation, artistic regression, Murou Saisei

## はじめに

一人の作家が同時に詩人であり小説家であるという例は、日本近代文学史上においてまことに稀有である。「犀星は、生涯をとおして詩的小説家であり、詩的随筆家であった。詩と散文は、あい携えて、犀星の芸術世界を深め、高めつづけていったのである。詩人ばなれをしてしまう小説家とはまったく異質な詩的小説家であった。」<sup>1)</sup>とあるように、近代詩の曙を高らかに歌い上げた島崎藤村、あるいは詩人として出発し早熟した同時代の佐藤春夫などは、小説家として大成した後、詩作をやめて、小説の創作に没頭するようになったのに対して、年齢、閱歴、環境、内的相克その他さまざまな積み重ねから、作品の外貌風味姿態には自ら大きな変化がありながら、もちろん詩作において一時期の後退或いは沈滞（いや、むしろ「暫くの休憩と、出直しの前の反省期」<sup>2)</sup>とでも言ったほうが妥当だろう）もあったが、しかし犀星は一貫して詩（俳句と短歌も含む）と離れることはなく、その出発から終焉に至るまで、ほとんど半世紀にも及んで詩と小説との二つの領域に亙って創作を続けた。その生涯を閉じたのも、「老いたるえびのうた」という一首の詩であった。つまり、生涯にわたって、犀星は詩を捨てることなく書き続け、しかもずっと一流の詩人であった。

日本文壇におけるこの異例な作家は、なぜ詩作をずっと続けていて、おまけに創作の挫折に出遭うたび、後戻りのように詩という表現形態への依存、いや「出直しの前の反省期」を繰り返したのか。さらに、詩作への「出直し」ばかりではなく、小説においても、同じスタイル、乃至は同じ題材の繰り返しをしたりしたのか。この現象の究明は、犀星文学の気魄を理解するのに大いに役立つことであろう。

## 一、退行 —— コンプレックスから身を守る防衛体制

退行 (Regression) とは、もともと精神分析者のフロイトの提出した概念である。精神分析学では口唇期 (Oral stage。生後～約一歳)、肛門期 (anal stage。一歳～三、四歳) と男根期 (phallic stage)、潜伏期 (latent stage。六歳～性器期)、性器期 (genital stage) という段階を経て、人間には、イド (またはエス)、自我、超自我とに三分できるパーソナリティが出来る。上記のそれぞれの段階において欲求が十分に満たされず、或いはまた逆に満足させられすぎると、それらの各時期に特徴的な精神活動に対して特殊な結びつき即ち「固着 (fixation)」ができて、成長中、もしか欲求不満 (frustration) の状況が起こるとそれらが再現するという。

実は一口に固着と言われるものには、幼年期の特定のリビドー (libido) に限るのではなく、そのあり方には、過去の体験に対する反応としての精神状態を自動的に延々と繰り返してしまう「反復」と、過去に外傷体験をした発達の段階で発達が停止してしまう「発達停止」などがある。したがって、退行は決してマイナスな働きのみを持つとは限らないのである。中でも、

自我による自我を助けるための適応的退行 (ARISE. adaptive regression in the service of ego) の中の、自我のための一次的・部分的退行 (と進展) (Temporary and partial regression (progression) in the service of ego) は、創造的退行 (creative regression) である。ゆえに、今日では、退行とは防衛規制の一つで、すでにある段階に到達した者、また成長途中の者が心理的安定を求め、ある時点において、それまでに発達した状態や機能、あるいは体制がそれ以前のより低次元の状態や機能・体制へ逆戻りすることだと、認識されている。

芸術家の創作に関して深い関係のある「創造的退行」の心理的メカニズムを見てみよう。クリス (Kris, E.) は、作品を創造する時、多くの場合、芸術家は積極的に無意識に退行し、みずからの無意識あるいは前意識にあるような欲動や葛藤などを目の当たりにして、これらを自分の内にあるものと感ぜずに、外からくるもの即ち靈感と捉える。芸術家はさらにその靈感を推敲によってより適応的に再統合して、芸術作品として生み出すという。ほぼ同じ時期に、ユングも、創造的な心的過程には退行が必要であると考え、

すべて創造的なものには、相反するものの統合がなんらかの形で認められる。両立しがたいと思われていたものが、ひとつに統合されることによって創造がなされる。これを心理的にみても、まず心の中に定立するものがあり、それに対して反定立するものが存在する。(中略) 自我はその両方に関与してゆこうと努力すると、自我はどちらにも傾けないので、一種の停止状態におちいってしまう。ここで、自我をはたらかせていて心的エネルギーは退行を起こし、無意識内へと帰ってゆくことになる。

このような退行状態になると、この人は外見的にはただぼんやりとしているだけであったり、幼児的なばかげた行動をしたりする。ぶらぶらしたり、ときに、いらいらした気分に襲われたりする。しかし、無意識内においては仕事が行われていて、自我のそれまでのはたらきと無意識のはたらきとが統合され、定立と反定立を超えた、統合的なシンボルが顕現されてくる。それは創造的な内容を持ち、それに伴われて心的エネルギーは進行を開始し、自我は新たなエネルギーを得て活動することになる<sup>3</sup>。

と、詳しい分析をしている。

上述のように、誰も過去に経験した快の記憶を再現する傾向にあるがゆえに、挫折に出遭った人は、慣れ親しんだ感情や方法での慣習や行動を繰り返そうとするのである。芸術家の場合も免れることができず、沈滞期になれば華々しい創作時期の作風や題材などへ「退行」したがるという心理はポジティブな力を持ったものだと認められる。

## 二、犀星における「固着」と「創造的退行」

文学創作をコンプレックス脱出の補償として求めた犀星は、生涯初期抒情詩時代とその後の三つの昂揚期とその間に挟まれた二つの沈滞期を経験した<sup>4</sup>。その創作歴を振り返れば、明らかに「創造的退行」を繰り返したのである。

### 1. 犀星文学の「固着」

「詩と文學とは、『聖書』なども含めてこの人に文字通り救いであった」<sup>5</sup>。犀星における詩と散文との関係は、犀星本人の作品中の表現を借りて言えば、

詩は彼の小説に相応はぬ心の風俗や溜息を盛るに便利だつたし、小説は又人生の荒涼を模索するに役立つことは実際だつたが、本来はその孰れをも手放し兼ねるのだつた。詩は詩のいとしさを小説は小説の親密を樹てることが出来なかつた。小説を書くために詩情や幽思を荒唐にする惧れがあつても、詩を捨てることが出来なかつた。かれらは孰れも姉妹のごとく相離れられないものだつた。彼は小説家であり詩人であり同時に俳人であり得てもよかつた。(「室生犀星論(自画像)」)

或る時期の僕は小説が書けないでゐると、詩ばかり書いてゐてそれで僕を建て直しをしようとしたり、詩がかけなくなると詩の悪口をいふやうな気持ちで、小説のなかにはいり込んで行つて憂憤をはらしたりしてゐたが、(中略)その孰方ともわかれることができなかつた。小説は直接に生計への重い役目をもつてゐたし、詩はなにやら小説とは少し清いやうなところがあつたし、詩とわかれてしまへばただの碌でなしの小説家になつてしまふとも考へられるのであつた。ただの小説家でもないはずであるのに見栄のある僕はやはり詩人といふ金看板のやうなものをおろしてしまふのに躊躇ひ、全く見えすいた男であつた。(「詩よきみとお別れする」)。

と、両者はいずれも欠くことのできないものであつた。「これを心理的にみても、まず心の中に定立するものがあり、それに対して反定立するものが存在する。」と前の引用通りに、詩と小説は実は互いに反定立していた。

しかし、犀星の創作において、詩と散文、一体どちらがまず「定立する」ものであつたのか。俳句により文学開眼し、俳句・小品文それから詩を投稿して、文学世界の市民権を入手した犀星は、その後抒情詩の創作により中央文壇にデビューし、さらに詩作を媒介にして念願の「永遠にやつてこない女」にめぐり合い、幸せな家庭を持つようになったがゆえに、彼の文学生涯において、句作を含めた詩作は、特別な意義を持っていて、彼にとって二重の意味の「固着」であつた。よって、

室生犀星にとっては、まず詩がある。けれどもこれは受けとる側の方でいう言葉であつて、彼にとっては最初何があるべきだつたのか？ それはいつも彼自身によって訂正されていて、しかし、その訂正は新しい局面を拓いたとみせながら訂正とはならず、つねに最初にかいた抒情詩の方へ引きずりこまれていくのである<sup>6</sup>。

との指摘通り、生涯にわたって犀星は、度々詩歌へ退行して、「定立と反定立を超えた、統合的なシンボルが顕現されて」きて、「新たなエネルギーを得て」さらなる創作をすることにとりかかつたわけである。

もちろんその後、抒情的・美化的な初期三部作、「市井鬼物」、童話、「史実小説」・「王朝物」なども相次いで彼の「固着」となつたわけで、犀星の芸術的退行は、詩と小説、そのいずれの分野においても行われていた。次では、犀星の詩歌への退行と自伝風小説における退行だけを見てみよう。

## 2. 犀星における「芸術的退行」

### 2.1 韻文創作への退行

初期三部作によって華々しい小説への転身を成し遂げ、小説界での名声を得た犀星は、「原稿料をとる蛆虫」（『泥雀の歌』）、「憑かれた人」（『憑かれた人』）となり、濫作を重ねた。しかし、詩的実感をもった小説という新鮮さで一时无手勝流に押し通したが、人生に対するリアリスト的な眼に欠けていた上、濫作がもたらしたマンネリズムも加わって、小説創作を始めた当初の魅力をなしていた独自の抒情性はだんだんと色褪せ、その作品群は読者に飽きられてしまった。一方、これと連動していた詩の方も現実的な世界に引きずられるわけで、価値の新しいものはあまりない。「どちらとも別れないでいると、どちらをも完成することがない、とはまさにこのことではないのか」とあるように、詩と散文、「自我はその両方に関与してゆこうと努力すると、自我はどちらにも傾けないので、一種の停止状態におちいつてしま」い、両者は彼の中で互いに毒しあい、静かな葛藤を演じていて、彼の文学創作の前進を拒み、彼を苦ませていた。「強ひて系統を求めるならば遠く「抒情小曲集」に根ざしその與韻を引いてある」（『鳥雀集』の「引」昭5・06）と彼本人が自認したように、『抒情小曲集』と制作年代を同じくした、その拾遺集とも言える時代遅れの抒情小曲集『鳥雀集』は、「抒情詩時代に終止符を打って、創作の沈滞期からの脱出を図」<sup>8</sup>るためのものである。そこで、「詩よ君とお別れする」（『芸芸』昭9・08）という意向表明は、この「定立」と「反定立」の葛藤と矛盾の激しさを物語っているものにほかならない。

こんなときこそ、「自我をはたらかせていて心的エネルギーは退行を起こし、無意識内へと帰ってゆくことになる」犀星の場合、「無意識内」の「固着」たる詩歌へ退行してしまった。

大正十四年頃から昭和八年くらの八年間、私は殆どめぼしい物を書かないで過ごした。濫作の後の私の眼はかすみ、感動に鮮意もなく、どうなつたつていいやといふ氣合いと、どちらにしても沈没するなら何時何処だつて構はないといふやけくそがあつた。何時でも自分の積み上げたものを壊すことで、壊すこと自体を痛快とするへんなくせのある男であつた。その八年間に私は詩を書いてみたが、詩ではいくらかの立ち直りがみられ(略)。(「私の履歴書」)

と、詩作をやめることが出来なかつたばかりか、かえって沈滞を打ち破り、劣等感コンプレックスから脱出するためには、自分の文学のありかを確認する必要に迫られたのである。現に愛児豹太郎という「子供を失う頃から小説の創作が少なく、詩作が多くなる。この詩の世界への傾斜と作家の心情とは無縁ではない。」<sup>9</sup>というのは、的を射た指摘である。挫折に出会うたび、犀星は詩作に慰みを求めたのである。

#### 詩歌の城

詩や俳句を一としきり軽蔑してゐたが  
このごろ仲々好い味のあることが解つた。  
一日に十枚文章を書いてゐても  
詩や俳句が一行一句もできぬことがある。  
詩や俳句の城へ入るものは

その城の中の庭や金銀の居間を知り、  
その居間に坐る儀禮を知り  
弓や矢や楯を把り  
寒夜になほ城を護る術をしらねばならぬ。

自分は既う何千枚書いてゐるか知らない。  
自分で考へただけでも茫とする。  
しかしまことの詩は何もかけてゐない。  
何千枚何萬枚書きつかれたあとで  
数行の詩や俳句を戀ひ慕ふことの嬉しさ。  
わが心いまだ腐らずにゐる嬉しさ。  
自分はへとへとになりながら  
眞個の心は城の中に目覚めている。

(『故郷図繪集』)

大正十五年六月号の『日本詩人』初出のこの詩は、『故郷図繪集』のはじめのほうに掲載されている。この詩集は、文学によって立身出世した犀星が、久しぶりに帰郷して、かつて自分の憎悪の対象であった故郷を見直したものである。このように、この第一の沈滞期の帰郷は、犀星に故郷の温かみの中で心を癒す機会を与えたのと同様に、「詩歌の城」への退行は、小説創作への勇氣と靈感を、彼に再び結びつけた。

まず俳句への退行を見よう。句作は、明治四十四年一月の『薬業評論』掲載の代作五句を最後に長く途絶えていた。しかし、大正十二年の関東大震災後、家族を挙げて故郷の金沢に帰省した犀星は、桂井未翁・太田南圃ら金沢の俳友と旧交を温め、北声会や中塚一碧楼・高浜虚子の金沢来訪の折の歓送迎句会などにも出席し、大正十三年初頭から本格的に句作を再開した。この第一の沈滞期に、自ら「有難い美しい母胎」（「詩と俳句との中間」『燕泥』大5・10）、「文学的なふるさと」（「発句道の人々」随筆集『文芸林泉』昭9）に退行し、句作による文学世界の市民権を入手するときの心境を温存することを通じて、犀星は大いに励まされた。彼の詩や小説などの大きな魅力の一つであるところの、自然の美妙的な美しさを繊細な感性と限りない愛情を持って歌う側面は、明らかに句作によって涵養された美意識、培養された愛の成長である。

それから、詩作へと度々退行した。「詩よ君とお別れする」意向を表明したにもかかわらず、再び「詩歌の城」に帰り着かなければならなかったのである。なぜなら売文の世界で「へとへとになりながら」も、「眞個の心は」詩歌の「城の中に目覚めてゐる」、いわば退行してからこそ「創造的な内容を持ち、それに伴われて心的エネルギーは進行を開始し、自我は新たなエネルギーを得て活動することになる」からであった。「詩歌の城」に入った犀星は、「居間に坐る儀禮を知り」、「城を護る術をしらねばならぬ」と覚悟している。「考へて見れば、この頃の犀星にはすぐさま新しい詩壇の傾向に追随するいとまは到底なかった。昭和二年の芥川の死以後の自らの変革の為の苦闘の頂点にある時期でもあったからである。その焦燥をふり切る意味で、

もういちどおのが文学の出発点に帰ることを必要と考えたの]<sup>10</sup>は、このことを指摘していると思える。

このように、犀星の文学生涯を振り返ってみれば、犀星は度々この「固着」へ退行し、相次いで詩集を刊行することを通して、自分の文学創作を発展させたわけである。したがって、

犀星文学の神髄は詩にある。犀星の小説の核には、詩がある。言い換えれば犀星は小説や随筆の形で、自己の詩精神を表現していたのだ。こういう小説における詩だけではなく、犀星は生涯詩作をやめなかった。小説を支える故郷として詩をたやさず、晩年まで詩人として生きた<sup>11</sup>。

つまり、「詩よ君とお別れする」という言葉は、事の実際として、むしろ詩と別れることができないうことの裏返し言葉である。その後の犀星は依然と非常に頑固などとも言えるほど詩作へ拘っていた。

もちろん、退行の目的は、創造と進展を図ることにある。「無意識内においては仕事が行われていて、自我のそれまでののはたらきと無意識のはたらきとが統合され、定立と反定立を超えた、統合的なシンボルが顕現されてくる」沈滞期において、犀星は「新たなエネルギーを得て」、更なる創作のピークに入り、昂揚する下地を固めたのである。第一期の句作より、第二期の句作はずっと人生的色合いが深まったし、第一の沈滞期の後の第二の昂揚期、それから第二の沈滞期につづく第三の昂揚期は、この「退行」の働きをまさに証明している。

このように、「く俗なるもの」を抜け出てく聖なるもの」へ突入するための犠牲に満ちた通過儀礼であったといえる]<sup>12</sup>詩は、犀星にとって重要な意義をもっているが、「詩はわれにとつて永遠の宗教なり」(『抒情小曲集』の序)、「詩は彼の文学的エリート意識を支えるものであり、小説はその全生活にかかわるもので]<sup>13</sup>あるとあるように、詩作はこの「固着」となり、「詩作を通しての成長が散文の世界へ芸術家を押し出し]<sup>14</sup>たのである。

だからこそ詩人として出生し、詩で文壇における地位を築き、それを固めた犀星は、詩に特別な感情を抱き、詩壇の後進へ温かい加護をして、多くの人の成長の面倒を見たり、晩年にさらに「室生犀星詩人賞」を設定したり、死の直前に『室生犀星全詩集』をまとめたりして、生涯詩作に励んできたのである。「老いたるえびのうた」という一詩をもってその人生の終幕を飾るといえるのは、詩が犀星その人を象徴しているように思われる。

## 2.2 散文創作における「退行」

詩歌への退行と同様に、小説においても、犀星は出発点に戻ってクリアしようとする傾向にあった。例えば、初期三部作が大成功したので、その抒情性・美化的な創作方法は、ずっと彼の文芸を貫いていた。また第二の昂揚期に「市井鬼物」が大成功したから、長い第二の沈滞期にずっとこの類のものを途切れ途切れに書き続け、ずっと最後の「舌を噛み切った女」や「かげろうの日記遺文」に結晶したのである。ここでは、字数の関係で、犀星の自伝風作品の内容と、彼が「月のごとき」生母と莫連の養母とを重ねさらに邂逅した女性を結びつけて「永遠」な女性像を描くことの変遷を概観する。

かんばしくない出生と悲しい生い立ちは、犀星のコンプレックスのもとである。ゆえに、犀星は度々これにメスを入れて、自己激励をする。彼は、初期三部作(大8・08)、「紙碑」(『文

芸春秋』昭3・06)、「自叙伝的風景」(『新潮』昭3・8~11連載)、『弄獅子』(昭11・06「紙碑」  
「自叙伝的風景」ともに収録。犀星最初の本格的自伝と言える)、『作家の手記』(昭13・09)、『泥  
雀の歌』(昭17・05)、『童笛を吹えども』(昭23・05)、『自叙伝全集 室生犀星』(『作家の手記』  
『泥雀の歌』の再構成 昭24)、「私の履歴書」(『日本経済新聞』昭36・11・13~12・07連載)、  
「青春放浪」(『読売新聞』昭37・02・14~12・07連載)、『われはうたへどもやぶれかぶれ』(昭  
37・02「私の履歴書」「青春放浪」「われはうたへどもやぶれかぶれ」など収録)と何度も自叙  
伝を書いているほか、金石時代を回想した抒情性に富んだ「海辺にて」(昭4・2)などの体験  
・身辺小説もこの類に属しているし、『杏つ子』(昭32・10)の冒頭一章も生い立ちを描出して  
いる。その目的は、「作家といふものはその生涯をつくして、絶えず自分をほじくり返してあ  
る者である」(『杏つ子』の「あとがき」とあるように、自分の悲惨な生い立ちを掘り起こし  
自分の生のありかを凝視することを通して、再び現実的な再構成を試みることにある。初期の  
赤裸々な暴露と怒りに満ちた表現から、最後の何でも普遍化・社会化して他人事のように淡々  
と物語るようになるこの変化ぶりは、さながら犀星本人の人間成長を物語るものである。これ  
らの自伝風なものと呼応するように、「市井鬼物」、「歴史小説」につづいて「王朝物」の卒業  
論文たる「かげろうの日記遺文」などはできたわけである。

もっともこの心境の変化を表すのは、養母赤井ハツに対する見直しであろう。『弄獅子』に  
おいて「腹汚い四十女」と描写された養母は、段々とやさしい母に見直される。大正十一年の  
五月、犀星はハツを東京に呼び、二週間ほどの間、田端の借家でもてなした。小説「母を招  
ぶ」(大11・7)はその一部始終を描いた。そういった養母へのあたたかい眼差しは、「朝子」  
(大12・11)「妻が里」(大14・9)「秋本の母」(大15・4)等の小説にも見られる。さらにハツ  
が昭和三年四月二十八日に亡くなった後、犀星(三十八歳)は同年七月号の『文章倶楽部』に  
「手袋」、「母の死」、「陸橋」というそれぞれ独立した三部からなった「母の死と前後」という  
私小説を掲載し、

自分は生みの母を能く覚えてゐないが、此の第二の母を母とすることは、最早何らの矛  
盾のあるものではなかつた、自分は彼女に手紙を書く時も曾て母様とか母上とか書いたた  
めしがなかつた。文字を知る自分の氣位はかういふ文字を書くことに、厳しい自尊的な命  
令のものに是を禁じてゐた。しかし今日はそのことさへ益のない自尊心にすぎなかつた。  
何よりも彼女は最早現世的ではなかつた。

と、養母への複雑な思いを淡々とした筆致で描いて結語したものである。それからハツの死の  
翌年の「母を思ふの記」(昭4・1)では母を悪しざまに罵ったことを悔い、今は「何か新鮮な  
愛情と接触を感じさせる母親である」と記して、自分の創作に無くてはならない存在だと痛感  
するようになる。

このように、自分の出生の問題を繰り返し追究し、自分の文学創作に無くてはならない養母  
を「ほじくり返」すことを通して、犀星は励まされ、さらなる創作に力むようになったわけ  
である。この心境の変化に伴い、犀星文学における女性像も変わり、「あにいもうと」の野性的  
な「おもん」から、「かげろうの日記遺文」の人生を「卒業」した「冴野」に進んできたので  
ある。



## 終わりに

このように、俳句・抒情詩・叙情性に富んだ初期三部作・野性に満ちた「市井鬼物」・養母などは、相次いで犀星の人生や文学創作生涯の「固着」となり、これらへの退行は、犀星文学を推し進め、更なる進歩を重ねさせた。このことが基礎となってきた「その最晩年の高揚期の諸作品は、単に〈動・俗・混沌〉の世界を躍動的に描出しているだけではない。そこには人生観の深まりが生んだ〈あわれ〉〈哀惜〉の微妙な色調が溶け入っており、晩年において到着しえたより深遠な世界の開示があ<sup>15</sup>ったのである。

## 参考文献

- 1 阿部正路「詩と散文の間」『室生犀星研究』第1輯 p11
- 2 三好達治「犀星詩(一)」『室生犀星全集一』新潮社版 昭39 p499
- 3 河合準雄『コンプレックスと人間』岩波書店 2001・12 p204
- 4 室生犀星の抱いたコンプレックスとそのコンプレックス脱出の努力などについては、詳しくは、一連の拙稿「コンプレックス脱出の犀星文学」『室生犀星研究』第22輯、「コンプレックス脱出の試み」(『室生犀星研究』第23輯)、「〈市井鬼〉による中途半端なコンプレックス脱出」(『神戸女学院大学論集』第48巻第3号)、「〈コンプレックス〉から〈自己実現〉まで」(『室生犀星研究』第24輯)、「コンプレックスの解消」(『神戸女学院大学論集』第49巻第1号)、「コンプレックス脱出への持続的試み」(『室生犀星研究』第26輯)、「芥川と犀星との交友について」(『室生犀星研究』第27輯)、「犀星の詩から小説への転身に見る立身出世主義」(『室生犀星研究』第28輯)、「犀星における娼婦愛」(『室生犀星研究』第30輯)参照。
- 5 中野重治『室生犀星』筑摩書房 昭43・10 p12
- 6 財部鳥子「犀星にとっての小説」『地球』1973年夏季号 p4
- 7 福岡多恵子編「室生犀星近代日本詩人選11」筑摩書房 1982 p118
- 8 木戸逸郎『ふるさとと遠きにありて』宝文館出版 1989 p76
- 9 星野晃一『室生犀星—幽遠・哀惜の世界』明治書院 平4 p29
- 10 木戸逸郎『ふるさとと遠きにありて』宝文館出版 1989 p76
- 11 奥野健男『室生犀星詩集』の「解説」大和書房 昭39
- 12 安宅夏夫「犀星における聖と俗」『解釈と鑑賞』昭五十三年二月号 p84
- 13 河村政敏「詩と小説」『解釈と鑑賞』昭五十三年二月号 p83
- 14 中野重治「室生犀星・人と作品」『日本詩人全集』新潮社 昭42・06。ここで、中野重治は、かつて詩人でありながら、詩人離れした小説家、島崎藤村との違いを、注意深くかつ適切に指摘している。
- 15 星野晃一『室生犀星—幽遠・哀惜の世界—』明治書院 平4 p12~13

(原稿受理 2009年1月20日)